乾いた心 下巻

正宗白鳥自筆草稿

特別
へ14
8052
2

81

76

を押んで持つてゐるおみよ自身の寫眞がますく見窓らしく思はれた。

（五）

汗まみれで顔を火照らしを坂を上つて従兄の家へ行つたおみよは、ばからも門口の木蔭を伸ゝ奇麗さが置かれてあるのを見ると、そつと格子戸を開けて、内の様子を窺ひ透慮して奥の間へ入つた。暑いの窺は、階下の座敷は一方の襖を閉ざして、あつたが、客の話聲

は二階から落ちて来た。

おみよは襖の間で息を殺して待つてゐたが、すると、二階から下りて来たおまきは、気色ばんだ顔して、「おくめさんが来てるのよ。困つてるの。……」きぬやゝんのお宍さんの後妻のおくめさんが今度朝鮮から来たのですよ」と囁いた。そして、襖を開けて、次の間を覗いてゐるお寝ぼすけ従兄の側へ行つて、一寸顔出して見せ」と頼んだが、従兄は頑なに首を振つた。

「指環を三つも四つも嵌めて、こんな大きなぴかぴかした指環を嵌つて、……」などと進めて云ふとも無く云つておまきは再び二階へ上つた。行きかけるお玄関から階下の部屋々々が見ぬやうに襖を引寄せた。

「みよ。お前は寫真を持つて来たのかい」と、意外にも従兄が訊いた。

「まるさいのがらあるんですけど……」とおみよは言淀んだ。

「持つてるのなら見せて見せろ」

おみよが躊躇しながら書物の間から取出すのを、従兄は奪取つて、「本人と寫眞とを見べて、「この方が無邪気でいてゞ。」と笑いつた。そして、これを見せる所がある。お前よも見せたものがあると、無雜作に云つて、用箪笥の中から一葉の寫眞を取出して渡おみよの前に置いた。何處かの學校の制帽を被つた若い男の半身像が、見るとはなくおみよの目に觸れた。……が、前の「ふゝん」と云つたやうな冷笑を洩らして寫眞は少し取ら

なかつた。従兄が寫眞の主を頻りに褒めて、おみよも咬かしてゐるのが、一々胸に響いたが、咬かせやうとゐるのがまぢ〳〵と分つて得なかつた。

そこへ、二階から女客が下りて來ると、従兄は慌てて襖の蔭へ身を寄せて見られぬやうにした。おみよも片隅に潜んでゐた。

俥の鈴の鳴るまで見送つてゐたおまきは、ほつと息を吐いて入つて來て、其處等の襖を開

放して、

「おみよさんはぜつとあの女を見なさればいいのよ。この前来た時もそうだつたが、今度も髪り立てて方々へ見物に行つてるんでもう。」

祖母さんは袖口の破れてる衣服を着て雑巾掛けなんかしてるのよね

「見せびらかしに来たから、おれは見てやらなかつた」と、従兄は自分の皮肉は仕打に興味を感じながら、「おれは祖母さんの怒鳴り聞いてねらやないんだ。……」

そりゃは取合はないで、おまもは吉村家の近情を強を報告した。

「きぬちやんは今三崎へ行つてるんですつて。おくめさんは沖で網を書く人と一緒で朝鮮から来たのでせうけど、その方は男や主人の代理らんぽらんで遊び歩いてるんでせう。荷物と云つたら犬もは行李や鞄を三つ自分の四つも持つて来てねながら、祖母さんは一文も金を持つて来て上げないんですつて」と、そりゃから祖母さんは側と養子側との両

方の親戚のいもとつなぎを話を運んだが、お
みよは何時もほど耳を凝らして聞取らない
で、先つもよりと見たばかりの寫眞の影を
頬りに頭の中で描いてゐた。そして、寫眞を
ついておまもが親身な、此方が冷淡なかま
へてゐるのを柔く取做して呉れるやうな親
身な口を利き今まで出すかと待つてゐたが、お
まもは吉村一家のことのみ樂がつて、話を
寫眞の方へ持つて来なかつた。
「もぬら　はやんは無邪気といへば無邪気だ

けど、隨分なお轉婆ね。
見たい處よ住つてゐるのよ、もぬらやんのや
うな品のいい顔した人は長屋
だから隣近所の人達は掃溜めに鶴が下りた
やうに思つて見てゐたんでせう。そして、自
る日隣の主婦が、貴女は沸不自
由な思ひもことばかりで
面しませう！お宅は何方沸身は何かと訊くと、
私の家は　と云つて、男爵でお父さんは貴族
議員よと、もぬらやんが答へた眞顔で

のですって。だから、男爵のお姫様が好きな男ゆゑ、まこんな職しい處へ来て馴れない水仕事なんかしてゐると、近所では評判なんなってるんですって。祖母さんがお前は雅ちゃのお蔭で大きくなったって窘めると、沸飯食べて大きくなりましたと竹箆返しの事をするやなんだから、ほんとまぬちゃんまは手がつけられない。

「でも、朝鮮の方が来たのなら、子供みよ

わね」

を泣ってかゆるかも知れんけど、後妻の方ならなかなかこんなことをするまいから、祖母さんゆるの點では安心だね」と肱枕で横なってゐた従兄が横嘴を押さんだ。

「でも、久江の遺言を持出してもおくめさんは鼻でおしらふって云ふ有様ですもの。そんな遺言は駄目です。と云って、意地みなって連れてかゆこば滅更困ますが情愛よりゆすりませんか。孫は皆んなはこれまでみ母丹青して育てた私の心をよろく知って呉ゆてる

から、私の生きてる間は誰やが何と云っても
私を棄てて行きやしないと自慢してねたけれ
ど、現はきぬちゃんが祖母さんを踏ッ付けて
けろりとしてる肩標ばんですからね。他のよ
供だって背丈が伸びるまつげて富てるなるも
のじゃない」

「そりゃ寶子が幾人もあるのは自分の側
へ置けないで、養育料が
は一人も
だけは毎月送りしなゆりゃ指せろけて
る父親が一書割り合はんじゃないか。たと

へ月給をどっさり取るよしたところが、そりゃ
ならそりゃで、洋手つてね
るまいから、役目柄月々極まって五十円も
六十円もこっち方へ送るのは隨分困難だろうよ。お
りゃは祖母さんの気の毒なよりも、父親の方が
餘程気の毒だと思ってる。おりゃが父親の地位
おねたら、祖母さんの玩具まそりゃるんめる養な生活をしなもやな
育料も出よ供もすのは先づ第一を蔑ろ
「親類の中皆がそう云ってるから祖母さん
の味方がないのよ。いくら手紙や口先で言

爭つたって何時までも埒が開かない、お屋さへ送らなければ今まで今までも祖母さんは降参する。からそれ限る。と、酷いことを云つてる人が多いんですからね。だけど祖母の平生の生活方もよく知つてる私は、どうしてもそんな薄情な考へは起せませんよ。況して用聞まだつて親切なるから、先方でも祖母とんを氣の毒がつて手助けをして呉れるの。先日も朝早く行つて見てると、酒屋の御用聞が来ると直に井戸水を吸んで、それから

今日はと臺所へ顔を出すんでせう。祖母さんもおいしいものがあると御用聞までもお裾分けをするんですがね。妾の中は妾の他人同士でね、こんな風まで人情をもつて交際つてゐたらそれ疑はしいだらうと思はれますよ。それはおくめさんは宿傳の無つ放しで、食べる物でも不味い物は手をつけないつていふんですから、祖母さんは気苦労を掛けまいとやうなものまるでなのおままは態度ならばしつ振りなら、

何かをみを[illegible]方から見下してゐたやうなおくめを軽蔑して反感を抱けば抱くほど、祖母を向つて同じ情の思いを[illegible]してゐたが、聴いてゐる二人の方では、そして感動してゐなかつた。

「[illegible]吉さん[illegible]へ一度何ふつ[illegible]なりなんだけど、ぢや、その方が朝鮮へお帰りまでは見合せることとするわ」

かう云いながらおみよは、先つも夜擦せの音と、別れ際の気取つた挨拶とをだけを耳に留めて、次安も服装を見ながつて、おくめをもむしろ敬意をもつ

て想像してゐた。貴夫人といふ文字の映へる連想でその人物をつくり上げてゐた。

「何[illegible]ふものですか」

おみよちやんは学問があるんだから誰れの前へ出たつて負けを取ることはないわ。おくめさんなんかいくら権式張つたつてお腹の中は見え透いてるんだからちとも怖かないの」

おままはおくめやもめ子を對する飽足らない思いを晴らすためよ、おみよを引合ひに出して褒上げてゐたが、宮城県のこと

を思出したのは餘程經つてからであつた。

「その話はもう相濟みなぬだよ。お前が廻り遠く云ふまはばないよ」と、從兄は云はれると、おまきは気を悪くして、

「貴下は先走りするからいけない。世一生お一度の事がもう手遅く極められて溜まるものですか。みよちやんはきぬちやんとは異ふいますからね」と云つて、從兄の袂の襞を打遣られてゐたが、從兄は來客のためみ

事を妨げられたのを零しながら二階へ上つて行つた。

「ぶやてやは私が頂きますよ、いつでせう。從兄さんは獨斷で押付けるんだから、何を云つたか知れないけど、気を留めない方がよこ庄ですよ」と、おまきはみよの憐れ陶しい顔付を目めつて云つた。

「私何ぶや気をめ毎ちやねません」

誠はこれで止めて、夕暮の仕度がはじまつた。

行水や

おみよは狭い臺所へ入って手傳ひしやうとしても、却って邪魔ばかりするので、矢張絲瓜の棚のほとりを退いて、見書を手にして、ぽつり〳〵と小聲で発音してゐた。すると、おまゝの癖の臺所仕事ばかりの小唄の口すさみが後から聞え出した。

従兄はあゝ云つてゐたけれど、自分の寫眞を見せやゞ醜い女として先方の気に入らないのを違ひない。気に入らないのが分つてゐながらいゝ気になつて話を進めるのは恥曝しだ

と、書を讀み疲れた目も、色の褪せた紫陽花の花に注ぎながら、おみよはたとへおまゝを勸められても管なく聞流さうと考へてゐた。

田舍おねた時父母の緣談を聞かされた時よは、よくも耳に入れないで、一図に先方の男を見下してゐたのだつたが、今度は男の方のみのよしあしを思ふに先つて、自分の取得のないことが強く念頭に浮んだ。……有樂座で見た顔も身装も美はしく美はしく、同窓の中の誰れ彼れや、あるいはもぬ

よしてもおくめあるしても、都會に多からう女の中で、自分のやうな者を撰取る男があるといふことは信ぜられなかつた。そして、まねんに姫様気取りで澄ましてゐたそれを、男盛りのおとしをしてゐる年下のが憎らしくもあるとも思ぬこと。

しきりに羨ましくも思つた。

夕餐の沸騰走るなつた後で一二時遊んでゐたが、おままからは案に相違して、一言も縁談を觸れなかつた。

あんまり遅くならぬ中にと遠慮されたのか、

みよは泊るつもりの當てが外れて、すぐに家へ帰つた。

望みを掛けてゐないし、よし話が進んで来ても此方から延期を乗出す運に行かないと思いながらも、従兄の音信を待設けてゐたそしてそれが淋しい知らずに私の上の慰めとなつてゐた。

「お前とはこの男とよく馬が合ふだらう。新時代の教育を受けた女を望んでゐるんだから」と従兄は云つてゐたが、女の學問が男の心を惹

く力もつてゐるのだらうか。

空漠たる希望を抱いて東京へ来たのだつたが、目や頭脳を痛めて得た多少の学問が、男の愛を得る足しになるのだらうか。おみよは取柄のない自分の取柄を其處に置いて見て慰めたりした。

が、待つても待つても、従兄からは音信がなかつた。懐しそうな手紙をおまもは熟読して、「お遊いよ入つしやいよ」という極り文句の返事が来たが、あの強みつしては

自活　独立

一言の暗示も與へて呉れなかつた。

は豫想通りの不首尾を覚悟してゐながらも、「あの話は駄目だがせ」と、断定されるのを恐れて、なかなかつた。

母の間まのみ通いる符牒見たいな文字で、書かれた母の手紙を捧して、そして悦くなかつたり、おまもの親切らしい手紙も物足らなかつたりする時は、むやみに讃めるつもりで書物を向つて

お紅

て気も物らし

たこともあつたが、この暑中休暇のはれの上は絶えず置かせてある書物が次第に茶の芽責の鞭となるので、彼女は屢々目を瞑り、あるいは頭を押げて暫眠りもしたりした。……近年は無比の酷暑といはせておる上用の間を、毎日、書通りの夕涼みをへ出ないで、書も夜も三畳の室で過して、銭い叔母もそへ辛抱強いのを驚かせた。目敏い鏡を取ると兄許が危いので、風呂屋へも成べく行かぬやうにしてゐた。……田舎ぢゃねた時分は雑誌やお涙

こともあつたのが、この頃はそういう無駄なものをお使銭を費すのが惜しくて堪らず貧の残りは、郵便貯金まで廻すことにしておる。億劫のためのみではなくつて、世渡や雑誌の記事の話は、おみよ自身の将来を思ひやるなことや、羨ましくなるやうなことも、いろく書物がかやてあるので、羨むのが怖いやうな思はせておるのであつた。

（千行廿字　伊東紙製）

六

早く九月が来て新學期が初まればいくと、おみよはるゆのみを待焦やてゐたが、今年は去年よりも一昨年よりも夏の歩みが遅かった。日は徒らに長く夜の明けがたをかこたゝることゝへあつた。

ところが、ある朝、主人の休日で叔母はじめ家の者皆が果しなく朝寝を貪つてゐるところへ、思いがけなくおまきが訪ねて来た。一人だけ早く起きて縁側で朝風に觸れて

ゐたおみよは、汚水や塵芥や、紙屑をへ散らかつてゐる狭い庭を見てゐながら、自分の家でない此の職しい掃除する気はらないで、たゞこのがらゐな家でも、母が建てゆかと一軒自分の家として持つてゐたなら広い心地のしいゝやうな小清洒ぱりとせるのだがと空想してゐたりして、何もしないで家の前の目醒めるのを待つて雨戸二三枚開けた外はおまきの聲を聞くと、胸騒ぎをおたが、

せて私ハで出た。

「もとも入つしやらないから、病気でゆしてるんぢやないかと思つてねたのよ」

おまきは此家へは[illegible]おみよの上京當時一度しか来たことがなかつたので、珍しもろに家の様子も見廻して、よくこんな所で勉強が出来ることゝ、おみよも元の毒と思いながら、[illegible]三畳の室への境涯入つた。

「この室は暑をろ[illegible]だわね。

わたくしまりしてねて勉強するのはいゝかも知れないけど」と云つて、窓から涼らしい庭を眺いて、「もろもいへば、私の

家の絲瓜はどつとり實が生りましたよ。隨分大きくなりそろなの。

「へえ。――」おみよは持て做[illegible]もなけやばならないと、どもまぎしよくて、寢不眠を小摩つて居る叔母は水菓子屋の有[illegible]を拭いて[illegible]駆出した。

そして、バナナや葡萄を買つて来たが、おまきが特別の用事を有つてゐるを遣へない と思ふと、気掛りでならなかつた。

おまきはおよみの出てゐる間を、叔母久振りの接拶を取かはして、おみよの日々のこ

とを訊ねた。

「みよ子さんの親御さんに頼まれて、お世話しとるんですけど、知恵遅れの子は、でなりません。勉強はしてねるし、お宅へ何ふ外さんは出歩くもんはよくこらないから間違いもありますまいが、去年あたりから見ると、たで人が変つたやうで、心配しますのが。何時も不機嫌な顔してゐて、飯を上る時は、黙俯いてゐて、此方から何か云つても、黙るそ

うして、首付くか首を振るかして、はきく口も利くこともしない例がありませんので、私どもも気を入らないことがあるのか、と自分は心配がありますが、しても見當がつきません。お宅へ居ました時はどんな風で沖子いますが知らん」

かゝる母が云ふと、おままは意外な思ひから、「私の家へ入つしやると、気軽によく話をしますよ。貞ゝ気で學問は凝つてるから、自然そうなるので沖子ませうよ」

と辨護して、「學閥は學閥として[illegible]みようやんか
今の間は結婚なすつたらいいと私どもは思つ
てゐますですがね」
「あの女はお嫁さんの役が動
まりますでせうか知ら」
「それは勤まりましようとも。[illegible]
すもの」
「それは[illegible]怜悧な女で
[illegible]怜悧なのは違いないんかやけ
ど、叔母さんは危かしがつてゐる顔付をして、「飯粒
[illegible]つてるところがあるんで困る
[illegible]
[illegible]

だらう

あくいふ風で

目

やうな

[illegible]ます

から。――――先日の晩も、夜中よる供をおい小用場
へ連れて行きました時も、何の気もなしにあの
女の部屋を見ますと、私の足音を聞いて目が
醒めたが、吃驚したやうな様をして燈火を點
けて、本を[illegible]読つて取るが早いか、聲を出
して読みなさるんです。目鏡を掛けてゐ
ないから私の顔ばよく見えませんでしたで
せう。もとよりしとてる様子が何かもまで
から、私が聲を掛けますと、口の内で
で何か云つて、[illegible]眼をあけまして私の

した

方を見て、慌てて燈火を消して寝なさるんでね。私は気味が悪いやうで寝ませんでしたよ。寝呆けたのしても変な錯覚でしたから」

「へえ。――――」

熟心ですからね」おまきは云つた。

おみよはやんは学問何気なく

おみよのこの変な挙動は、叔母さまもおまきもの意味

の感じ

おみよは分らなかつた。

そこへ、おみよはバナナや葡萄を持つて入つて来た。この頃お珍しい晴れ〳〵した顔

もした。

「叔母さんもお食べなさいな」と、入代つて庭を立つた叔母さまの顔を掛けて、自分から先きにバナナをつけて、朝寝前の空腹はお旨く食べた。叔母さまはお礼を云つて禁の間へ入つて、泣叫ぶ子供を叱りつけてゐた。

「随分騒がしいこと。困るでせう」

「馴れてばさうでもないんですわ」

おみよは小声でさう云つて、此間中から従

兄の家で絶えず問題とされてゐる吉村一家のことを訊ねて、自分は向けられる詔の鉾を少しの間でも避けやうとしたが、おまきは何時ものやうな[illegible]調子で強情なかつた。

暁かは相変らず変切らないでゐると、簡短な云つたくけで、

「今日は私言難いことを貴女方へ帰つたが、後の成分は云はず

おくめは朝鮮

「へえ。……」と、おみよは目を伏せて息を殺して次の言葉を待つてゐた。

「先日御覧なすつた宮兵の人を貴女はどう思つてゐる。先方では大変無気になつてゐるし、丁度いゝ縁だつて、従兄さんがいとりで喜んで急立つてるんですがね。

勧めると、眉毛は大のつついたやうな[illegible]

いでする[illegible]無論いゝ縁なんだけど、勉強最中なんですかねえ。

の貴女は結婚のお勧めするのは私は言出し難いの。……貴女はどう思つてゐる。

[illegible]の先方が貴女の理想とかなつたら、思ひつて行く気はありますか」

従兄は迫られたのでは仕方はしら話を傳へよ
来たといつたやうなは生ぬるい勧め方だつたの
で、おみよの心もちも緊張しなかつた。先
方が東気なはつたといふのは、たとへ（が）お
（大変）まけがあつても、悪い気持はしな
かつた。
「目が悪いのも承知なんですつて。貴女はよ
はす目よ孫がつたことがあつて（その人は一二度）、
貴女のことはよく知つてるんですつて。初め
の間は隠してたけれど、――――この春大

井さんとかの家へ遊びに入りしつたでせう。そ
の時に貴女は全つた笑はのよ」
「へえ――――」おみよは気のない返事をしながら、ふと そこで全つた野中といふ男を生を
思出して、「あはて、大井さんのお宅へ伺つた時は
は同じクラスの女が四五人も一緒だつたので
すよ」
「その中で貴女が一番目に留まつたのでせう。そ
の野中とかいふ人は、この夏学校を卒業して、
来月から何處かへ奉職することなつてるんです

つて。他のことは兎も角生活の心配はないとのはなさうなの」

野中といふ男が寫眞で見ても、もつと[illegible]の話から推しても、目鼻立ちは優いところのない無骨一遍な人らしくおまきは思はれてゐたので、尚更[illegible]の高をくくるなあみよ勧めかねたのであつた。自分から本気になつて勧めるくらゐなら、きぬ子の恋人よりも遥か立勝つた男を撰んでやりたかつた。

「従姉さんはどう思つてゐらつしやるのね。今

結婚した方が私のためも幸福なのでせうか」

「おみよは暫く黙つてゐた後で、きつぱりした口調で訊いた。

「るゐは貴女沖自身よりよくお考へなさいな。私なんが責任をもつて貴女の運を極めることは出来ませんよ」

「大抵な人が突然話を聞いて突然に結婚を極めるんでせうか」

「るゐは「縁談」といふものは、不意に極るものらしいのよ。話が永引くと故障が起つて纏まそして

り難いんですつて」

「隨分妙ですわね……」おみよは何の波瀾もなくつて、知らない男の手を渡てやる多くの女の心が不思議に思つてゐた。そのよりも唯一の命の綱として縋りついて、眞夜中にも跳起きて手をおしたりなどしていねた智識の書物を享てて、気心をまるで知らない男と一生の緣を結ばうとするのが不思議に思はれた。道で擦違つた男も同様に思はれた。胸を覗めゐながら野中といふ人が、自分の夫を果して極る

のだらうか。

おまきはむしろおみよが一言で断るのを待設けてゐたのに、切角の心の動いてゐるやうな様子を見せらるので、案外に感じた。平生の見識振つた態度からいふなつて、きぬよと違はない女になり下つたやうな気がし出した。

「よろくお考へなさいよ。今の返事をしなくつてもいいから」と、繰返した。

「私の家は貧乏だから、仮令金なんかは充分

を出して見やしませんの」

「そんなことは後の話だわね。貴方の決心さへつけば、従兄さんが故郷へ掛合つて呉やるでせうよ」

おまきは此方へ来た次第を知んの旅へ寄つて行く筈だつたので、簡単な話丈は聴つてゐないで、そつと暇を告げた。

悦しい時も船んど涙一滴零したことのなかつたおまきが帰つた後で、机に向つてゐると、何故と

もなくぽろ〳〵涙を落した。そして、目鏡を取つて袂で顔を拭ふ。ろて、浸出る涙を溜めてゐたが、ろみが元ふる元はみない心の慰めをなつた。

「もあ沸飯を上つて下さいと」呼立てられたので、惜しい涙を拭つて茶の間へ出て行つて、一人ぽつちで食事をしてゐると、叔母は先つも縁談のことを不遠慮な訳

収た。

「おみよさんが此間から何だか思案してゐな

さんすと思つて居りましたと、叔母はそれで理由が分つたといふやうな顔付をして、獨り合點をして笑つた。

おみよは侮辱を受けてゐるやうな感じて、否定してしまいたかつたが、流石にぐーと否定も出来なかつた。その人のためは思ひ遣いそれたつてゐたやうな顔付をして、獨り合點をして笑つた。

（七）

ゴ〆

例の事をまとまるまでの四五日間は、おみよは屢々理由の分らない涙を落した。

しまはうかと、従兄夫婦や叔母は勢して、そうすることが自分の意気を現して痛快なやうな思ひもあつたが、これを取外しては自分の前途は碌な縁談などありさうな気がしなかつた。

――――野中といふ人の顔形や聲音を一心に記憶から呼起してゐ、この人が自分の夫になるのか知らんと、不思議な思ひはする

ほどで、恋しさに懐かしさとも起らなかつたが、自分のやうな者を真に思つて呉れる男がこの世のゆめあるといふことの有難さも、大きな救ひた様なものに出来そうでなかつた。

で、おみよは決心して従兄の家へ出掛けた。見馴れた庭おは紫陽花は踏み方もなく散つておたが、綿入れの裏は大きくなつてだらりと垂れてゐた。

「今日は甚様の祖母さんが入つしやる筈なの

よ」と、おまきは云つて、きぬ子も正式に結婚することやうやく決まつて、九月の末かナ月のはつたら式を挙げるらしいと、そのための祖母の骨折を感謝して、「ぬしさんの方が祖母さんを嫌いて置かうと思つてゐるの。――吉村ではいくら内輪が苦くつても、嫁入りは可成りに手を出すつもりなんで。今更花嫁さんでもないでせうね。みよやんこそ金無垢の花嫁さんだから、そゆてる大威張りで

お人形をんのやうな粧立て行けるんでてあね。この頃は化粧師を雇つて来て粧りをさせることが流行んですつて。目でも鼻でも髪の仇まで毎取つて奇麗なのするんですつてさ。――みよちやんが島田を結つて花笄を差して、品のいい裾模様を着てお人形さんおなつたところを、私の式服を見たいやうな気がしますよ。

おまきが冷かすのが眞面目なのか分らないやうな調子でおまきが喋舌るのを、おみよは

聞苦しい思いをして聞いておた。花笄や裾模様とかは名を聞いただけでも彼方とかの縁のないものこやうであつた。

「先方では返事を急いでるんですがね。貴女はどうかつもりましたか」と、おまきは言葉を改めて訊いた。

「従兄さんがいろと仰云ばいいのに」

「承知しますか。――だけど、約束が極つたら取消す譯には行きませんからね。一生の大事はことですよ。私達が無理なお勧めしたく

めだと後で貴女は悔まれても困りますからね。
御自分でよろしくお考へなさいよ」
「考へて仕方がないわ」おみよは
やうな云つて、眉の間に皺を寄せた。
が彼女の顔を老けてゐた。
「ちやゝ、いゝんですね。直ぐに先方へ通知し
て、それから故郷のお母さんの承諾を求めな
ければ……」
「イヽ故郷へは私が云つてやります」
両親は喜びてゐるや反対する気遣ひのない

ことは分つてゐるが、上京前の公言の手前中
途で決心を翻へした様を詳く報告しなけれ
ば後見たい思ひがした。が、両親よりも自分
の為めして言出せもの道がつかぬ
やうな気がしたので、のかねての心掛
「従姉さんは考へる〳〵つてよく云
いなもるけれど、私いことも考へる力な
んかもともないんですよ。私の目がいけなく
なつたやうな物を考へる暇も駄目なんだか
ら、何事も人任せで生きて行かうと思つて

るの。……だって、妾の中は恐ろしくって不安
心でならないんですもの」
「貴女なんか妾の中はこわからやありません
か。いとり身で学校通いしてる様こそ淋しの空
でおらやるでせうが、結婚したってしてて
ばかりはありませんよ」おまきは自分を實の姉
のやうに信じて慕つてくるおみよも、軽卒な
嫁はすぬる物足らなさを感らして、お
みよの望みの小いのをいたましそうに云つ
たが、

「でもいてわ」と、おみよは娘らしい感情の
微動も見せないで答へた。「私野中といふ人の
ことをいくとも悪いとも解へてゐないのです
けど、どうせ私みは自分のまゝなる人がいろ
んな要求をする資格はないんですもの。……東
京へ来て私が覺えたことはそのくらゐのことだ
わ」
「外面から見て太々しいやうな可愛い気のな
い言葉がおまきの口からは忌々しかつた。が、「が
や通ぐるる先方へ通知しますよ」と念を押して通
(従兄さんに云つて)

い強よ一先づ區切りをつけた。

くどい話が止切りてから、おまもが急ぎの縫物を取掛つてゐる間、おみよは側のやうな緣側の方へ退いて、暫慣的な書物を目を曝してゐた。すると、暫くして吉村の祖母が訪ねて來て、愛相のいい口を利き乍、速數へ通つた。寫れてゐても、長い年月の苦勞を凌いで來た身體はがつしりしてゐて、由緒ある家柄を思はせるやうな顏付は品があつた。おみよは口數は少くて、親しもうな無沒法のお

詫をし出た。もしして、おまもが[illegible]いろんな噂をしだすと、周囲の都鄙ならぬやうみと、玄關へ引込んで二人は脊を向けてゐた。

「お前よもいろ〳〵心配を掛けたけれども、まあ〳〵折合がついて一安心してゐますのやや。此方へもおいかた〳〵顏出してやうと思い〳〵沸無沒法しました。此間から原口たんへも木下へも二度も三度も出掛けて、腰はだるいし途中は長いし、大閑口したのだ

よ。電車に乗ると直ぐ酔ふのだら、彼方の方へ行くのは私は大禁物なのだやがな。それに原口さんでは應接間で椅子に腰掛けられるし、木下では毎日も約束しともながら家を明けて行先が分らないといふので、思い半日も待たされるし。……それでも手紙ぢや済まがはつきりしないから、二度行くところは三度行つても、私は意地になつて出掛けたのだ。……かうして祖母さんは腰骨の折をやるまでお前達のために足搦いとさんちやから、

お前達も家の用も足して貰やるやうでないと罰が當る前は。らうと云ふと、吉樹も欽吾も私の留守の間に庭を掃くやら干し物を取込むやらで、頃はなかなか手助けもして呉やるんだよ。

祖母の話は相違へ外れて、容易に元のとこへは戻らなかつた。

「そして、章吾さんの方からはこれまで通りに送りもして下さるんですかね。おくめさんが祖母さんの平生の御様子を見て

お婦人なすつたんだから、手落のないことはよろ
しかるべき
分つたでせうね」と、おまきは肝心
祖母さんの
なことを泄出をうとつとめた。
「――――私は長い間考へて、何方かも都合のいて
やうな理窟のよく立つたことをいろいろ考へたの
でな。それは昔樹や歌舞が中夢を卒業する
まで今のやうにして、私の側へ置いて、卒業し
た暁から、でもそつくり朝鮮の方へ渡すことま
したら、向うでも貴方はするまいと考へて
居るのだよ」

「そうなるとよ沛庭んすがね」
「それでも聞かないといふ法はあるまいと
思つて居るのがやが、月々入るものは入るも
のだでもぬの仕まつつけなければならんの
である。私は家屋敷を拵当にして融
し、
通をつけやうと、かう動見を極めたのがが、
お前のお父さんは頼んで貰へますまいか」
「家屋敷もなくしたら祖母さんの身みつくも
のは何のもなくなるがやありませんか。もうし
ないで、結婚費のしろ毎月の入用のしろ、朝

辭の方から出して貰おいなさいましたな。當然ですものおまきは祖母がかねてこれぱかりは兄祖の遺物として自分の息のある間は命の人手は濕ともないと云つてねたことを思つて痛ましくなつた。

「子供を寄越さなければ仕送りを絶つといふのなら、私の方でも決心を見せるつもりなのよ。これほどの決心を見せたら、朝鮮の方でもその中は折れて來るまたらうよ。私の物と子供を育てしては紙切れ一枚もないまでよして子供を育

でたら、久江のあの無で滿足して呉れるだらうと思つて居るのかや」

「そうですかね。……だけど一文なしになつてかね、そあ金を寄越せと云つたつて當てはなりますまいから、祖母さんの物はあなたをおつけなさらない方がよかあありますまいか」

「そんなことは云はないでお呉れ祖母は堅く保つてゐる最後の決心を指が震い決心をめいてゐるのが、おまは振

向いたおみよの目は映った。そして、気の毒な身の上と慨んでゐた祖母さんとは、全く別な人の平生強ひて聞いてやるおみのよは思はれた。

祖母はきぬゑの結婚式の準備を急いで、知かな目付をした。